

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第六回

人の命にかかわること

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 第六回 人の命にかかわること

本物のチームワークは1足す1を2以上にするが、男女混合のチームは、それを大きく上回る力を持つ。男女の異なる観点がお互い補いあって、包括的で刷新な仕事が可能になり、新取の気概に富むチームが成長する。女性社員を増やすメリットが、ここにある。

簡単な理屈だが、経営陣の頭とハートが繋がらないと、組織に本気でやる気は起らない。実体験が最も早い近道なのだが、女性が少ない職場では難しい。

その悪循環を破ってくれと、男の組織文化が強い某国際機関に頼まれたことがある。世銀で体験していたことをぶつけてみたらよく効いた。その時の講演が手元にあるので、抜粋和訳してみよう。

「世界各国が直面する開発問題への解答は、『何をすべきか』ではなく『すべきことをどう捉えるか』に在る」

「エネルギー関係の仕事に就く皆さんは、電力という言葉から何を連想するのか？（…点滅スイッチの音…発電所…風力発電機…太陽光発電パネル…）なるほど…。皆さんが抱くイメージには、女性の影さえ写っていない！（笑）」

「その女性の居る所へ案内しよう。目を閉じて聞いてほしい」

「インドの内陸奥深い在所。藁葺き屋根に土壁の農家。真っ暗な家の中。かまどからちらちら漏れる薪の火。猛煙の中に土間にしゃがんだ人の影が浮かぶ。背の乳飲み子をあやししながらパンの生地を練り、平たく潰してかまどの壁に叩き付け、煮えたぎる鍋の中身をかき回し、くるくる働くその人。乳飲み子の小さな咳が止まらない。苦しそうに泣く子の背を叩きながら、その人も咳き込む。振り返って恥ずかしそうに微笑む彼女の目は真っ赤に充血し、止まぬ涙で頬がひび割れている…」

「かまどの煙は、数々の病気を大きく上回る死亡原因。その煙が毎年200万人の女子供を世界中の途上国で殺している。インドでは、母親の背で煙にさらされる幼児の急性呼吸器官炎症や伝染病の感染率が通常の6倍にもなる。き

れいな電気を引くだけで、5歳以下の幼児死亡率が半減する」

「また目を閉じて、聞いてほしい。痩せ細った少女が薪を運んできた。ひと束は頭に、もうひと束は腰に、灼熱の空の下を何時間もかけて集め歩いた薪。その薪を土間に置いてしやがみ込んだまま、死んだように動かない。20歳に満たない彼女のお腹が大きい…」

「薪集めや水汲みの重労働に女性が1日平均6時間を費やすインド農村地帯では、流産の率が3割にもなる。その重労働は、農村での発生率が異常に高い子宮脱出症の主要原因でもある。煙たい台所に入り浸る妊婦の死産率は、通常の高さになる。医療部門の援助のみでは防げないこと。癒す力は電力なのだ」

「人の命や病の苦しみを金に換算することはできない。しかし、無煙かまどを備えるだけでも、毎年1人あたり5千円から1万円の国家医療費が節約される。電気を引けば、その倍の1〜2万円の節約になる。貧民人口世界一のインドはもとより、途上国経済に与える影響は、某大だ」

「室内汚染は殺人魔。この発見は、電力開発事業の社会利益に対する判断基準を大きく変えつつある。その問題に焦点をあてたチームは私の部下。医学者や、エコノミスト、エンジニアなど多分野から集まった専門家が、情熱をひとつにして成し遂げた」

「しかし、男女混合のチームだからこそできた仕事だ。そもそもかまどの煙に潜む魔を体で知り、人の命にかかわることと組織を動かしたリーダーが、女性だった」

「人類の半分を見落とすのは思考障害と同じこと。馬鹿だったなど皆で笑える日は来る。必ず来る」

すべきことをどう捉えるか。その違いが組織を変え、国を変え、地球を変え、人の命さえ救う。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇八年九月一九日付の電気新聞に、寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。